

平成28年度みやぎきの文化を考える懇談会（第2回）議事録

1 日 時 平成28年11月14日（月）13：30～15：25
2 場 所 宮崎県庁附属棟302号室

<主な意見>

○国民文化祭では地域のさまざまな伝統行事や節目の行事に焦点を当てたイベントをとおして自治体間の交流をさらに活性化し、目利きができるリーダーや語り部となる人物を育成していくとよい。

○各地域にある博物館や資料館の資料を一堂に集めた企画展を県央部で開催したり、巡回展を行うことで、各地域にある資料を鑑賞する機会が増え、各館のアピールにもなり、県民の刺激にもなるのではないか。

○他県では地元の計画を東京の大手コンサルタントに任せてしまい、地元住民が不満をもっているという話も聞いている。国民文化祭は人や地域を育てる機会でもあるので、そのようなことがないように取り組んで欲しい。

○宮崎県民は地元のことを知らずに県外に出て行ってしまふ人が多いのではないか。県外に行くと地元の唄や踊りをとおして地元のアイデンティティが身についていることを実感する。

○文化に携わる人間は10年、20年と変わらないにも関わらず、行政職員は3年程度の短い周期で異動するので、一から築いた信頼関係をまた築かなければならない。できれば文化担当職員の異動周期を長くして欲しい。

○情報発信に関しては、文化施設や文化団体だけでは限界があるので、行政が商業施設や商工団体などと連携できれば双方にメリットが生まれるのではないか。

○芸術科目の授業数の減少や、親の経済的事情や関心度により子どもの文化的格差が生まれている。親世代に文化の大切さを教えることはとても難しいが、子どもの頃に文化に親しむ心を育むことで、その子どもが大人になっても自分の次の世代にも伝えることができるようになるのではないか。

○文化への関心の低さは、時間的、経済的な余裕がなくなっているのも要因の一つ。その問題を解消することは難しいが、県民が知る機会、触れる機会をつくることは重要。

○情報発信が難しいのは、そもそも関心がないから情報が目に入ってこないことに理由がある。小さい頃から関心を持てるような子どもに育てる必要がある。そのためにも授業の中でどれだけ芸術の楽しさに触れることができるかが重要である。

○文化への関心を高め、盛り上げるためにも、多くの人に関わってもらふこと、意見を出し合う場や機会が必要。

○宮崎大学では考古学の枠が減らされる中で、えびの市の古墳の調査は鹿児島大学の研究チームが行っているような状況。県内で文化芸術の専門家を育てることを常に意識していないと、いざとなったときに必要な専門家がいなくなりかねない状況にある。県内での研修機会を増やそうにもままならないのではないか。

○中学高校の美術教員の採用がほとんど行われていない中で、美術を好きな人材を育てるのは難しいのではないか。

○国民文化祭では、県民にチームごとに調査してもらって案内図を作ったり、地元の人たちにいろんな役割を与えて、参加意識を高めてもらふのもよいのではないか。

○ビジョンの中に宮崎としての雰囲気やカラーが打ち出されるとよりよいものになるのではないか。